

『比較文学・文化論集』という「広場」

深見 麻

はじめに

一九八五年、一冊の論文集が出版された。卵色の表紙にシンプルな字体で『比較文学・文化論集』というタイトルが印刷されている。比較文学界の重鎮であられる芳賀徹先生を顧問に迎え、福田真人、瓜生研二、村上孝之、大石紀一郎の四氏が編集に携われた労作であった。

以来十七年、編集は基本的に代々東京大学の比較文学比較文化研究室所属の院生が受け継ぐという、いわば永遠に素人編集の論集でありながら、今号で二十号を数えるところまで何とか辿りついた。費用のほとんどを寄稿者の負担で賄い、若干を前号までの売上や寄付で補うという、経営的にはぎりぎりの状態を相変わらず続けてはいるものの、若い比較文学・文化研究者の論文発表の場として、この小冊子は一定の役割を

果たしてきたと自負している。これまでの寄稿者のほとんどは、現在各地の大学院等で教鞭を取られ、学会でも活躍されている。そうした方々のキャリアのある部分にこの論集が関わることはできたということは、私たちの誇りとするところである。今号は第二十号目という区切りでもあり、この小さな、しかし誠実に歩んできた論集が、比較文学・文化研究との関わりで果たしてきた役割を今一度踏まえ直し、これからの新たな歩みを展望することとしたい。

比較文学・文化研究の論集として

そもそも比較文学・文化研究とは、どういうものなのか。それを考える上できわめて象徴的なエッセイが、記念すべき刊号の巻頭に掲載されている。芳賀先生の手になるエッセイ、「南に窓を」——金素雲の訳詩一篇——である。題材となった

のは、朝鮮語と日本語のバイリンガル文学者として東大とも縁の深い金素雲キムソウンが訳した、ある朝鮮の詩である。参考のために、全文を引用しよう。

南に窓を切りませう

畑が少し

鋤で掘り

手鋤テウチョで草を取りませう

雲の誘ひには乗りますまい

鳥のこゑは聴き法楽ハルカクです

唐もろこしが熟れたら

食べにお出でなさい。

なぜ生きているかつて、

さあね——。

（金素雲訳『朝鮮詩集』より金尚鎔キムサンヨウ「南に窓を」

田舎に引っ込んで、少しばかりの田畑をたよりに悠悠自適の暮らしをしているらしい詩人の心情を歌った詩。そこに感じられるうらかな日なたのおいと、金素雲の訳語の軽や

かさ、伸びやかさ、そしてそれを鮮やかに読んで見せる芳賀先生一流の洒脱な気分にあふれた文章が相俟って、読者に何とも暖かな心地よさを与えてくれる。このような瀟洒なエッセイによって、『比較文学・文化論集』の歴史は始まったのであった。

しかしこの冒頭のエッセイは、単に瀟洒であっただけではない。内容においてもそれは、この論集の始まりにふさわしいものであったように思う。日本語に訳されたこの朝鮮詩について「少しばかりの読みを試みる」(第一号、一頁)という体裁で始まったエッセイではあるが、実際に読者がそこに見出すものは、単に一篇の詩の解釈といったものではなく、その詩をきっかけとして、するすると手繰り寄せられてくる、様々な国、時代の文学の断片である。

詩の一行一行を読み進めながら、或いは白秋が、或いは上田敏訳のポオル・フォオルの詩が、また途中には文学を通り越して日韓の家屋の比較が、次々と現れては消えていく。読者は書き手と共に一篇の詩を読んでいきながら、実は書き手の連想という別の幻灯を見ているようでもある。これだけでも充分知覚的でおもしろい文章ではあるが、しかし、もしもこのエッセイが、このような書き手の気の赴くままといった連想を描写することに終始していたなら、それは教養書を飾る

にはふさわしくとも、學術論文集の巻頭には如何か、ということになりかねなかつたかもしれない。

しかし、やがて芭蕉や陶淵明、李白、が引き合いに出されるころになると、様相は一変する。そこに現れるのは、東アジア隠者文学の系譜とでも言うべきものであり、この一篇の詩からその豊かな伝統が逆照射されて行くのである。

しかも仕掛けとなった題材が金尚鎔の原詩そのものではなく、日本語への訳詩であつたことによつて、この伝統の照射はより手の込んだものとなる。エッセイの終盤は、原詩に忠実な翻訳とは言い難い、曰く「画龍点睛ともいうべき」(第一号、八頁)最後の二行へのフォーカスで締めくくられているが、書き手はこの二行を、金尚鎔が唐代の大詩人李白を踏まえていることを理解した上での訳者の半創作であり、

この訳詩二行の向こうに原詩は遠のき、李白はさらに遠い借景となつた。しかも金尚鎔も李白も、訳詩の奥に寸分狂わず歪みもせずに見えている、といった気配である。

と、読み取るのである(第一号、八九頁)。つまり、東アジア隠者文学伝統のエッセンスは朝鮮語の原詩で絶えてしまうのではなく、それを日本語に訳した一人の朝鮮人詩人の手に

なる新たな創作にも受け継がれ、(日本語)読者の目の前にも伝えられたのだ。

「場」としての論集

もちろんこれは論文という体裁を取つてはいないものであるため、影響関係の有無について厳密な考証などは行われていない。しかしそうした論文調とは無縁でありながら、読んでいる側の知的好奇心を的確に刺激する。この一篇の日本語訳された詩の向こうには、時代、国を超えた影響関係のネットワークが存在していることが、あざやかに見えてくるからである。

このようにある作品を手がかりとして、そこに合流する様々な文化横断的な影響に着目することは、現在においても——テーマ、方法論の多様化が進んだ現在においても——比較文学・文化研究の最も基本的な方法であると言つてよいであろう。そもそも源流としての比較文学は、文化横断的で、一國の(固有の)文学史、文化史という旧来の枠組では捉えきれないテーマを研究する領域として出発したのだから。そしてこのことによつて、比較文学・文化研究はある宿命的特質を背負うことになつた。それは、対象への多角的(多文化的)な視点と、それを支える広汎な知識が研究の前提として必要

となったということである。

しかしながら、これは古今東西の文学・文化に関する膨大な知識を、いたずらに丸暗記していくというような難行苦行を意味するものでは必ずしもない。芳賀先生のエッセイが正に垂範するように、根底にあるべきは自由で感度の良い知的好奇心である。この知的好奇心のしなやかさをいかにして保持していくかは、比較研究をするものにとっては永遠の課題であろう。感覚器や筋肉と同じく、この知的好奇心というものもまた、使わなければ衰え鈍ってしまうような種類のものだからだ。常に新しい情報を求め、そこから得たものを自らの研究にフィードバックする。これが延々と続くことが理想であろう。

論集というメディアが果たすべき役割もまた、このフィードバックの中に然るべき位置を占めることから始まるのではないだろうか。つまり、研究者が自らの研究成果を発表する場であると同時に、彼に新しい情報をもたらすツールでもある。そしてその新たな情報に触発されて書かれた新しい論文が、再び紙面を飾り、それがまた他の研究者に新しい情報を与えていく。この小さな論集もまた、この幸福なフィードバックの中に自らの体の大きさに見合うだけの場所を占めたいと願うのである。

もちろん、知的フィードバックの装置としての役割なら、比較研究に関する論文集ならずとも、学術誌一般が持っているものであろう。それに対し、比較文学・文化研究に関わる論文集において特に重要なのは、「場」としての開放性をいかに確保するかということである。すなわち、××学派の「牙城」とでも言うような閉鎖性を帯びてしまうようなことのないように、様々な人々が行き交い、集う「広場」のような環境を整えることである。

『比較文学・文化論集』の場合、そのような開放性の確保は、掲載論文の執筆者の募集範囲においては、ある程度達成されていると考えている。東京大学比較文学・文化研究会の同人誌として出発しながら、同人以外からの寄稿を歓迎してきたこともそのための施策の一つであるし、また寄稿論文を基本的に無審査で掲載するのも、出来る限り多くの若い研究者に現段階での研究成果を発表する「場」を提供することを重視しているからである。

結果的に、多様な問題関心を有する執筆者によって、実に多彩なテーマの論文が紙面を彩ってきた。試みに創刊号の内容を挙げてみると、冒頭は先に見た朝鮮の詩を題材とするエッセイ、続いて、自伝における「自己なるもの」の哲学的考察、森鷗外のイブセン観、中国故事の日本における翻訳（意

訳) 物語である『唐物語』の原典考察、明治初期の翻訳小説『花柳春話』を例にして、当時の日本における西欧的恋愛の受容を考察するもの、フランス人ジャーナリスト、エドモンド・シャルルルーのゴンクール賞受賞(一九六五)作『忘却のパレルモ』読解、カフカ作品における動物形象とカフカの詩的自我との関連を考察するもの、一九一〇年代ドイツに始まる表現主義演劇が小山内薫に与えた影響、と古今東西にわたる多彩なテーマの論文が顔を揃えている。第2号以降も、各時代、各文化における文学、演劇、写真、思想史、美学、哲学、社会学、そしてそれぞれにクロス・ジャンルするもの、と号を重ねることに内容の多様化が進むことはあれ、後退することはなかった。

読者の中にはこのように多彩な目次を見て、統一感のなさといったネガティブな感想を持つ人々もいるに違いない。だがそれは今まで述べて来たように、比較研究の特質からすれば、当然の結果なのだ。また、これほど多様なジャンル、テーマにわたる論文をすべて読むことに嫌気が差す人、最初から読み飛ばそうと考える人、と接し方もさまざまであろう。もちろん読み方は自由である。「広場」に集う人々全ての話を聞く必要はない。ただ、そういう人たちがいることを横目には見て、「広場」全体の雰囲気を楽しんでほしいと思う。全て目

に入るものを暗記しようとするかのような神経質さも、コート襟を立てて足早に広場を横切るだけの無愛想さも、どちらもあるしなやかな知的好奇心を磨くことには役に立たないと思われるからだ。そのような読者を勝ち得てこそ、この論集の意義もより一層深まろうというものである。

今後の課題

もちろん、この二十号に至るまでの歴史の中には、達成できた部分がある一方で、まだまだ努力の余地が残されている部分もある。特に、そのようにして多様なソースから集めた研究成果を、どれほど多くの読者に伝達できたか、という点になると、必ずしも「優」がつけられる状態でなかったことは認めなければならぬ。同人誌でしかも学術論文集という性格からすれば、元々想定するに足る読者層はきわめて限定されていることは確かである。だが例えそうであっても、大学、大学院という知的に恵まれた環境において作っている以上、もう少し宣伝上、販売上の工夫が必要とされているように思われる。この点においては、全面的に編集側の責任であり、今後その方面の技術向上を目指したい。

またその宣伝技術にも関わることであるが、創刊された当時に比べ、より多くの人々、特に比較文学比較文化研究室外

の人々とのコミュニケーションを図るためのツールは、飛躍的に進歩した。そうした新たな環境に適応していくことも必要である。現在東大の比較文学比較文化研究室のホームページにおいて、本論文集に関する情報が公開されている (<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/graduate/graduate.html>)。で「学生の活動」をクリック)。今のところ本論集の紹介と論文募集要項程度の情報であるが、今後バックナンバーの目次などなど、より充実した情報公開にして行くことも考えている。今号を手に取られた方にも、ぜひ一度アクセスしていただきたい。

何はともあれ、まだ十七年、二十号である。今号はちょっと一休みがてら、来し方に思いを馳せてみたようなもので、これまでの号と同じく、通過点であることには変わりない。一休みが終わったら、ひょいと腰を上げて、また歩き出すのである。